

定年退職をむかえて・・・

山上 精次

ついにと言うべきか、やっとと言うべきか、この3月を以てぼくは定年退職の日を迎えます。専修大学に職を得て実に40年、多くの方々に支えられて何とか満期退職の日を迎えることができそうです。ただし、この巻頭言に着手したのは2月の後半、書き終えたのは3月上旬なので、あと20日ほどは残っています。その間に天変地異とか事故とか急病とかの出来事がなければ、という条件付きではありますが……。それにしても、ありきたりな感想で申し訳ありませんが、まことに40年は長くて短い。おもな学歴と履歴を表1に書いておきました。

表1: 山上略歴

1948年	広島県松永市（現福山市）にて出生
1954年	松永市立今津小学校入学（1960年卒業）
1960年	松永市立大成館中学校入学（1963年卒業）
1963年	広島大学附属福山高等学校入学（1967年卒業）
1968年	東京大学教養学部入学
1972年	東京大学文学部心理学科卒業
1972年	東京大学大学院文学研究科心理学専攻修士課程入学
1977年	東京大学大学院文学研究科心理学専攻博士課程単位取得退学
1977年	東京大学教養学部助手
1979年	専修大学文学部講師（発達心理学）
1982年	専修大学文学部助教授（発達心理学）
1989年	専修大学文学部教授（発達心理学）
2010年	専修大学人間科学部教授（発達心理学）
2019年	定年退職

こうして書き連ねてみると色々なことをやってきたものだと思います。一行一行の履歴の中に、さまざまな出来事が圧縮されていて、とてもきちんと整序し軽重を整えた形で、語りつくし書き残すことはできません。そこで、読者のみなさんには申し訳ありませんが、ぼくの脳内のどこかの場所で、不規則かつランダムに発火する神経細胞たちの気ままな挙動を制御することなく、意識の上にポップアップする思いをそのまま記してみます。ちょうど睡眠中に見る夢のように話があっちに行ったりこっちに来たり、脈略があるようでなかったり、そんな風な文章になってしまうと思いますがご容赦ください。

過去・現在・未来について

さて過ぎ去った月日は過去として厳然と残ります。これは誰も動かすことができません。しかし過去のできごとの評価はその時々で揺れ動きます。突然まったく唐突に、圧縮された過去の時間と出来事が解凍されて、脳内に溢れ出てきます。退職間際になって、一層頻繁に過去の出来事に関するこの脳内プロセスが起動されるようになりました。残念なことに、その「過去」の大半は悔悟や痛恨の思いを惹起させるたぐいのものです。中には羞恥の余り思わずわあーと大声を上げたくることもあります。ごく稀にですが、幸せだった出来事の記憶も出てきます。そのときは自然に頬がゆるみ目尻が下がっていると思います。しかしなかなか意識的にこのポップアップの過程をコントロールすることはできません。

一方、現在という「やつ」は時間軸上の長さは一瞬のくせに、主観的「密度」は変化します。つまり現在に属する事柄、たとえば眼前にあって直ちに処理しなければならない事柄などは、これを書いている2019年2月末から3月初旬においては、数年前に比べると件数自体が大幅に減っています。それに加えて、万が一ミスしたとしても結果は山上個人にのみ覆いかぶさってくるだけで、他の人々や組織に影響・災禍が及ぶことはほとんど無くなっています。つまり、現在の密度はかなり疎になっていると思います。けれども、そもそも一瞬を分母にして密度を計算するのは変なのかも知れません。

しかし、現在という厄介な「やつ」はもうひとつ嫌な性質をもっています。現在は文字通り時々刻々、瞬間的に過去に移行します。だから、おのずから過去に属する事柄はどんどん蓄積し肥大化します。一方、その分だけそのスピードで未来が短くなっているのですが、それはさておいて、幸いにもすべての過去に関する事柄が脳内に残るわけではないので、脳の保存容量的にも心理的にも何とかやっていけるわけです。

過去と現在はそんな感じですが、じゃあ未来はどんな感じなのか？ 最近、まれに意識的に「自分は未来をどう考えているかについて考える」ことがあります。これはなかなかぼくにとっては難問で、大概短時間で集中が途切れてギブアップします。半年ほど前のことになりますが、これをあれこれ妄想していた時に、複数回繰り返し

て脳裏に浮かんだことばがありあます。「老兵は消え去るのみ」ということばです。

「老兵は消え去るのみ」について

この言葉は 1951 年に米軍のマッカーサー元帥が退任にあたって議会でのスピーチの中で使って有名になったものです。

Old soldiers never die; they just fade away.

これが日本のマスコミで紹介された時、老兵は後のことをごちゃごちゃ言わずに、ただ黙って消え去るべきである、つまり「敗軍の将、兵を語らず」的な紹介のされ方がなされ、それがわが国内に広がったようです。

ぼくもじつは長い間、「辞めるヤツは黙って消えろ」的な意味だと信じていました。実際、既に最近半年ほどの間に何箇所かで、そんな意味合いでこの言葉を使いました。しかし、どうやらこの解釈は日本のマスコミの（最近でもよくある）単なる誤訳・誤解釈だったそうです。この言葉は、もとをたどると米軍のウエストポイント士官学校で歌われていた歌で、さらに遡ると、英軍の軍歌で次のような内容だったとか。

Old soldiers never die, never die, never die,
Old soldiers never die.
They just fade away.

Young soldiers wish they would,
wish they would, wish they would,
Young soldiers wish they would,
Wish they'd fade away

この英軍軍歌の最後の 1 文（2 行）が大事なのですが、ここで言いたいのは、若い兵は fade away を望んでいる、つまり与えられた自らの軍務を果たし後世に名誉を残すことを望んでいるという意味だから、軍歌として戦意高揚の歌になるわけです。もしこの fade away が、黙って消え去るという意味だったら若い英軍兵士は戦う前に戦場から消えたいと言っていることになります。だからマッカーサーの言いたかったことは、老兵となって（自分は）戦場を去るが、しかし老兵（自分）の名誉は永遠に残らない、ということではなればなりません。

さて、ぼくがこの半年の間に老兵云々と何回か発言した際には、マッカーサー発言の意図した正しい意味ではなくて、日本のマスコミが誤って伝えた方の意味、つまり「老兵は黙って去れ」って方でした。間違った意味で言葉を使ったという点で、とても恥ずかしいのですが、もっと恥ずかしいのは、もしぼくの発言を聞かれている方々の中に、正しい方の意味をご存知の方がいらっしゃったら、山上は「自分は老兵となって消えるが、自分の仕事と名誉は永遠に残る」と言いたいのか、とお聞きになったわけです。これは第 1 点の恥ずかしさを何

ぞう倍も超える恥ずかしさで、この「事件」も思い出さずだけで耳が赤くなります。穴があったら入りたい気分です。

老人とは

老いた兵士の話が長引きましたが、ではそもそも老人って何でしょう？ 老人または高齢者の定義は、「老人福祉法（1963 年；昭和 38 年）」において、実年齢で何歳からという明確な規定を避けてはいますが、実質的には「65 歳以降を老人と扱う」という風に読むべき法律になっています。一方「後期高齢者医療制度（平成 20 年）」によれば、75 歳以上が後期高齢者であるという定義になっています。その中では 65 歳から 74 歳が前期高齢者とされています。いずれにしても現状では事実上、65 歳以上が高齢者＝老人ってことになりますね。

ところが老年医学会は、2017 年に高齢者の定義と区分を次のように変更することを提言しました。

表 2: 老人医学会提言（2017）

年齢範囲	日本語	英語
65 ～ 74	准高齢者	pre-old
75 ～ 89	高齢者	old
90 ～	超高齢者	super-old

実際、75 歳までは元気な人が多数派になっているというデータも背景にあるようです。それらを根拠にして、老人医学会は「人生 100 年時代」というキャッチフレーズを打ち出しています。これに従うと、70 歳のぼくは「准高齢者」になります。いわば准教授みたいなものですね。つまりちゃんとした教授に至る一歩手前の先生、ちゃんとした高齢者の一歩手前にあって、やや未熟で足りないところのある高齢者という意味です。そうしてみると、ぼくはまだまだ修練を積みねばならぬ、ということですね。これには強く納得させられます。

定年制

わが国では定年制というのが当たり前になっているので、世界中の国でも同じようになっているのではないかと考えていたのですが、これまた大きな誤解でした。定年制を設けて一律に仕事を辞めさせるのは、「年齢」に基づく差別にあたる。これは「人種」による差別、「性」による差別と同じで、先進諸国では憲法で禁止されているらしいのです。よく考えてみれば、日本は「性」による差別も広く公然と行われているし、「年齢」による差別が行われても誰も疑問に思わないだろうと思います。

わが国では、年齢による差別というのが別・逆の意味で使われている場合の方が多いかもしれません。つまり日本は老人天国で若者が圧迫されて活躍の場所を奪われ

ている、けしからんという形ですね。これももっともな面がありますが、しかし大きな社会的な圧力になっているわけでもありません。とにかく人権に関してぼくたちはかなりぼんやりした意識しかもっていないのかも知れません。

個人的には、一定の物理年齢ですべての人を一律に退職させるという現行システムはそんなに悪くはないと思っています。その理由は、生物にしろ組織にしろ、継続して生存・存続し続けるために重要なことが2つある、第一は「多様性」ですが、もうひとつは「世代交代」。これをおろそかにすると、どの生物種でも組織でも必ず短期間で滅びる。だから、世代交代の観点からして、定年制にはとても意味があるとポジティブにとらえています。年齢のラインの引き方の細かい点には言いたいこともあります、70歳をもって職を強制的に剥奪し、後進に道を譲らせるというのは、わが国のアカデミアの現状をトータルに見ると、まあまあ妥当な制度だと思います。

大学の年齢

専修大学は間もなく創立150周年を迎えます。どの時点で本学が創立されたと言えるかは諸説あります。実際、150年まえの「専修学校」が専修大学の大学としてのスタートポイントであるかどうかについては、やや厳しい意見もあります。ま、それはともかく本学が150周年をセールスポイントにしているのはみなさまよくご存知の通りです。

ところで、ちょっと見方を変えると、150歳というのは人生100年時代になると、ひとの人生の1.5人前にしかすぎません。組織＝大学の年齢としてみても、じつは150年というのは、とてもとても短い部類であって、いわば弱者で若造です。世界最古の大学（西洋型の大学という限定付きで）であるイタリアのボローニア大学は1088年創立で931歳。イギリスのオックスフォードは1167年（＝852歳）、ケンブリッジは1209年（＝810歳）。歴史の浅い国＝アメリカのハーバード大は1636年（＝383歳）です。

こうしてみると、大学の場合には、創立後の年数を10で割れば、だいたい人間の年齢になる感じです。大学の年齢を老人医学会的にいうと、ボローニア大学（93歳）、ケンブリッジ大学（85歳）が立派な老人ですね。ケンブリッジは30台後半のまあ壮年ということになります。とすると、専修大学はがんばっても15歳です（笑）。伝統があるとか、長い歴史とか転んでも言えない、ひとで言えばせいぜい思春期前期の若者です。過去の長さを誇る前に、これからいっぱい新しことにチャレンジし、たくさん経験と知識と積み上げ、ますます発達・発展し

ていかなければならない年齢だと思います。

伝統、伝統とお題目を唱えている方々は、15歳までうまく行った方法でこの先もやっていこう、先輩たちや自分たちがやってきたことは素晴らしいことだ、ということだと思います。スローガンとしては良いのでしょうが、本音で（あるいは科学的に）そう信じるのはまだ早すぎると思います。いやいや、そんなことはない、日本国内で他の大学と比べると150年の本学は古い、とおっしゃる方もいるでしょう。けど、それは平均寿命が5年ほどしかない野生のニホンヒキガエルが井戸のなかで集まって、年齢を自慢しあっていて、おれは5歳、偉いだろうと言っている風ですよ。ヨーロッパヒキガエルは30年以上、生きるらしいです。

専修大学が高等教育機関＝大学として本領を発揮し、その社会的価値が認められるかどうかは、これからにかかっているでしょう。本学は、りっぱな大人となるための努力が必要な時期でしょう。老成した気分にならず、思春期のチャレンジ精神でどんどんと新しいことに向かっていくべきでしょう。大学という組織を人の年齢とアナロジーするのが乱暴なのはわかっていますが、先に述べた「多様性」と「世代交代」の2つのキーワードからしても、150周年で浮かれているのはとてもあぶない。

企業の年齢

人の年齢、大学の年齢と見てきましたが、世界の企業の年齢を見ると表3のようになっています。世界の企

表3: 世界の長寿企業ランキング

順位	会社名（国）	創立案
1位	金剛組（日本）	578年～
2位	池坊華道会（日本）	587年～
3位	慶雲館（日本）	705年～
4位	千年の湯古まん（日本）	717年
5位	法師旅館（日本）	718年～
6位	源田紙業（日本）	771年～
7位	シュティフツケラー・ザンクト・ペーター（オーストリア）	803年～
8位	Staffelter Hof（ドイツ）	892年～
8位	パリ造幣局（フランス）	864年～
9位	田中伊雅仏具店（日本）	885年～
10位	王立造幣局（イギリス）	886年～

業の年齢を見ても、1000年が目安となっています。日本の大学は総じて若造ですが、企業の方は世界の長寿ランキングの10位に6つも入っています。日本国は特殊なので大学の歴史が浅いのは仕方ない、とは言えませんですね。グローバルというキーワードが大学紹介の中で

踊っています。極東の島国（＝小さな井戸）の中で自画像を作り上げて自慢し合うのではなく、グローバルに自分自身を見て自己像を形成するべきだと思います。

心理学の年齢

さて最後に、心理学の年齢について考えてみます。

心理学は、その源流まで遡ると大変に長い過去を持っています。少なくとも紀元前 350 年前後には、アリストテレスによる「心理学」説が刊行されています。わが国では、高橋長太郎がアリストテレス全集第 8 巻「心理学 1（総論）」（河出書房）として訳出しています。河出の初版刊行年は 1948 年のことですから、ぼくが生まれた年になります。ちなみに高橋長太郎は 1976 年から 82 年までの 6 年間、専修大学の第 11 代学長でした。ぼくが専修大学に入職したのが 1979 年なので、その時の学長でいらしたわけです。大変にお酒がお好きで、当時、お酒をめぐる楽しいエピソードをたくさんお聞きしました。また高橋学長とは、生田キャンパス内で幾度かすれ違いましたが、もともとわが国におけるアリストテレス哲学研究の泰斗であることを学部心理学概論の授業で学んでいたせいもあるのでしょうか、泰然として世間を超越されているような風格を感じたものです。

話が脇にそれましたが、心理学の年齢は、学問の源流まで遡るとエジプト、ギリシャ時代、つまり 2400 歳以上と言えます。古くから、人が人間のこころの働きにいかに関心をそそられたか、その不思議な特性に驚嘆していたかを伺うことができます。一方、現代につながる

科学的心理学の誕生は、ヴィルヘルム・ブントがライプツィヒ大学に実験心理学の研究室を開設した 1879 年とされます。わが国では、その 24 年後となる 1903 年に、松本亦太郎が東京大学に実験室を開設したのが最初になります。科学的心理学の年齢はわずか 140 歳程度ですね。専修大学に心理学教室が開設されたのは 1967 年ですから、およそ 50 歳になります。

心理学だけの歴史で見るとはなくて、科学一般を大きな眼で眺めてみると、17 世紀の科学革命あたりをスタートポイントと見ることができます。すると科学一般の年齢は現在およそ 450 歳になります。だとすると、科学的な現代心理学は、科学全体の中でやっと後半 3 分の 1 あたりに生まれた後発の若い科学と言えます。専修大学に心理学教室が作られたのは、現代心理学が生まれた後半 3 分の 1 ですから、心理学についても、人の一生とのアナロジーをしてみると、まあせいぜい 10 歳程度の子どもということになります。物理学や化学などの大人の科学に比べるとまだまだとても未熟者、もしかしなら「准科学」段階かもしれません。大いにチャレンジし新しい場面に打って出ることが必要だと思います。

むすび

冒頭申し上げたとおり、これはぼくの脳内でランダム発火する神経細胞に誘発されポップアップした「夢」のなせる業です。あるいは加齢によって衰退した脳の暴走による「現^{うつ}とも^{まぼろし}幻」ともつかぬたわ言とご覧いただき、失礼の段あればどうぞご容赦ください。